〔論文〕

近代日本のレイシズム
——民衆の中国（人）観を例に——

小松　裕

"Pigs" and "Pigtail"（豚尾）
—Japanese People's View of Chinese in the Modern Age

Hiroshi KOMATSU

要旨

近代の日本人のほとんどは、まぎれもないレイシストであった。それは、中国（人）観が証明している。江戸期には、満州族の風俗である「弁髪」をもって、清国人を「芥子坊主」「ぱっち坊主」と呼んでいたが、そこに侮蔑的な意味合いは含まれていなかった。それが、江戸中期以降に少しずつ変化し、アヘン戦争などで中国が列強の前に敗退すると、知識人の中に中国を反面教師とする中国観が成立してくる。そして、明治に入るとすぐに「チャンチャン坊主」という侮蔑的な呼称が使われはじめ、「豚尾漢」などの呼称とともに都市部・居留地から地方へと徐々に広まっていった。その過程は、同時に、清国人を「豚」の漫画や絵で視覚化し、蔑視の対象にしていく過程でもあった。しかし、日清戦争までは、こうした中国人観が地方の民衆の中にまで浸透していたとはいえず、侮れない強国とする認識も存在していたが、戦勝により、国民的レベルで侮蔑的な中国人観が定着していった。

キーワード　中国観、差別、レイシズム、「ちゃんちゃん」、「豚尾漢」、「豚」

はじめに

ある民族が、他の民族をどのように表象してきたか。

ことばによるもの、漫画や絵によるもの、と表象の仕方は多様であるが、その表象の中にレイシズムが見え隠れしていることは否定できない。それは、ジョン・ダワー『人種偏見』やサム・キーン『敵の顔』などの研究を参照するまでもなく、明らかなことである。

しかし、他民族をことばや漫画で表象するのは、なにも戦争の時に限った

ことではない。日常的に形成されてきたそれを、戦争は激化させただけのことである。とするならば、その形成過程にこそ光があてられなければならないことになる。

本稿の課題は、「チャンチャン」や「豚尾」（とんび）など、中国人に対する侮蔑的な呼称が成立し、中国人に「豚」のイメージが投影されるようになる歴史的過程を明らかにすることを通して、近代日本のレイシズムの一端を提示することにある。

近代日本の対外観をめぐる従来の研究では、もっぱら、知識人のそれが中心であり、さらに文献史料の分析が中心であった。民衆に視点をあてた研究や、ことばのなかでも呼称をとりあげた研究、漫画や絵に注目した研究はほとんどなされてこなかった。

本稿の概要にあたる文章を、私はすでに、『日本史のエッセンス』の中で発表しているが、そこでは漫画や絵を紹介することはできなかった。その後、本稿が対象とする時期やテーマに関して、漫画や絵に着目した研究が、滝澤民夫「日清戦争後の「豚尾漢」的中国人観の形成」や大日方純夫『はじめて学ぶ日本近代史』によって発表された。本稿では、漫画や絵に加え、呼称の問題もあわせて取り扱うことで、両者が相関的に作用して中国人に対する侮蔑意識を形成・蔓延させていった過程を明らかにしたい。

一般に、近代日本の中国観には、ふたつの大きな画期があったといわれている。一つは、幕末期で、もう一つが日清戦争期である。しかし、民衆の中国観に視座を定めて考えれば、中国（人）に対する侮蔑意識が一般に定着するようになったのは、日清戦争が画期であった。横浜に住んでいた荒畑勝三少年（後の寒村）は、「支那人は元来、戦前は一般にすこぶる親愛されていた。（略）彼らが少なくとも富山の薬売りよりは親しまれ、且つ好遇されていたことは疑えない」[1]と回想し、群馬県の沼田で少年時代を送った生方敏郎も、「この戦の始まるその日まで支那人を悪い国民とは思っていなかったし、まして支那に対する憎悪というものを少しも我々の心の中に抱いてはいなかったのだから」[2]と振り返っている。

本稿では、江戸期から1910年代までの長いスパンで見ていくことで、「チャンチャン」から「チャンコロ」へと蔑称が転換していく時期についても考察

を加えたい。

1「チャンチャン」などの蔑称の形成過程　江戸期から明治0年代まで

満州族特有の風俗であった弁髪から、清国人を「ばっち坊主」や「芥子坊主」と呼ぶのは江戸期に始まる。しかし、そこに侮蔑的な意味は含まれておらず、単なる呼称に過ぎなかった。

もっとも、明国の滅亡が契機となって「日本型華夷秩序」が形成されてくるとする研究もあり、儒学者の中には清国を密かに軽蔑していたものもあったろうが、一般の民衆の中国イメージは、陶磁器や屏風などに描かれた、愛らしい「唐子」に代表される。

こうした中国観が転換の兆しを見せ始めるのは、18世紀に入ってからではなかったろうか。近松門左衛門の代表作『国姓爺合戦』は、1715年11月1日に大坂の竹本座で初演されたが、好評を博して17ヶ月にも及ぶロングランを記録した。近松物第一の当たり物といえる作品である。主人公は平戸に住む日中混血の「和藤内」。明国の忠臣の血を引く「和藤内」が、明朝の再興をかけて清国に攻め入る話である。その出陣の場面は、次のように描写されている。

「軍勢催し韃靼へ逆寄せに押しよせ。韃靼頭の芥子坊主。捻じ首つらぬき追っぷせ。切りふせ。御代長久の凱歌をあげん事和藤内が心魂に。徹する所。天の時は地の利にしかず。地の利は人の和にしかず。吉凶は人によって日によらず。此のまますぐに御出船道すがら島々の夷をかたらひ案の中なる軍せん御出陣といさみしは。三韓退治の神功皇后艫舳に立ちし荒御前を。今見るごときいきおひなり。」

和藤内の出陣に当たり、「神功皇后」の「三韓退治」という神話が想起されていることは、考えるべき一つのポイントである。一般に、幕末に近づくにつれ、神国イメージや豊臣秀吉の朝鮮侵略への肯定的イメージが語られるようになるとともに、対外的優越感が萌芽的に形成されてくることをあわせて考えるならば、近松の『国姓爺合戦』の「韃靼頭の芥子坊主」という表現には、若干の侮蔑的な意味合いが含まれていたと考えることも可能である。

知識人レベルで、中国に対する評価が決定的に転換していったのは、1840

年にはじまるアヘン戦争による中国の敗北であった。さらには、1856年のアロー号戦争でもあった。それを見事に代表するのが、福沢諭吉である。

福沢は、1865年に発表した『唐人往来』の中で、中国は、アヘン戦争で「英吉利より痛き目に逢ひ」、「又々性も懲もなく」英国の軍艦と戦ってやっつけられた。「是れ皆世間知らずにて己が国を上もなく貴き物の様に心得て、更らに他国の風に見習ひ改革することを知らざる己惚の病より起りたる禍なり。言語道断、風上にも置かれぬ悪風俗、苟めにも其真似をすべからず」(3)と述べている。そして、アヘン戦争でイギリスを相手に戦った林則徐を「智慧なしの短気者」とまで形容している。福沢は、『世界国尽』(1869年)でも同様の中国観を展開しているが、このような「反面教師」「悪い手本」視は、佐久間象山などにも共通していた。

しかしながら、幕末維新期にあっても、理想とする「周」と現実の「清国」とを区別して、中国に対する伝統的な崇敬の念を抱いていた人間も多かった。とりわけ民衆の中に根強く息づいていた。たとえば、信達一揆の首謀者と目された菅野八郎や、羽後本荘の老農菅原源八などは、強烈な排外意識と日本を「神国」とする観念を有していたが、中国に対する尊敬の念も併せ持っていた。菅原源八は、中国も「神国」であると考えていた。

ここで注目すべきは、假名垣魯文の『万国航海　西洋道中膝栗毛』である。いうまでもなく、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』をもじったその海外旅行版ともいうべき内容の戯作文学であるが、その二編上(1870年)では、『国姓爺合戦』を引用し、主人公の弥次郎と北八が自らを「大日本神国のお旅人さま」とする規定とともに、「ちゃんちゃん」や「豚の尻尾」という言葉が頻出しているのである。たとえば、上海に上陸したときは、「男子ハ老たる幼きを選バず等しくちゃん〳〵芥子坊主」とのべ、旅宿でビールを飲んで騒いでは、「ナンダこの毛唐人めら勿体しごくもねへ大日本神国のお旅人さまがたがお酒をめしあがッてお出であそバすおざしき間近く泥沓を踏込みやアがつて失敬厄介どつけへそツけへ其処一寸も立せねへぞサアこつちへ這入て酌でもしろいやだとぬかしアぶらさがつた豚の尻尾を引ずりこむぞ」と怒鳴りつけている。

この『万国航海　西洋道中膝栗毛』では、第三編の「自序」の中で「支那

学士」に「ちゃん〳〵ぼうず」とルビがふられているほか、「ちゃん〳〵坊主」という表現も、第三編と第十編下に登場する。こうした「ちゃんちゃん坊主」や「豚の尻尾」、さらには「おけしちゃん」という使用法には、明らかに侮蔑的な意味が感じ取れるのであるが、「ぶらさがつた豚の尻尾を引ずりこむぞ」と怒鳴った直後には中国人にひっぱたかれて尻餅をつくなど、侮蔑的な「まなざし」がそのまま彼我の「力関係」を規定するものにはなっていないことにも留意する必要がある。

明治6、7年頃には、いわゆる「開化物」と称される本が盛んに出版された。その代表的なものの一つである加藤祐一の『文明開化』(1873年9月)では、「散髪にはなるべき道理」の部分で、次のように述べている。

「漢土も明といふ世の時分までは、惣髪で居たものじやが、韃靼といふ片隅の国から起つて、明を亡ぼして、清といふ世に改たまつた、其頃から其の韃靼の風に成て、皆芥子坊主に成たのじや芥子坊主あたまといふものが、見よい天窓(あたま)じやとおもはしやるか、ひんもなく威もなく下人(げす)あたまにちがひない、此方の野郎あたまも、身贔屓なり見馴て居た事故、をかしいとも思はずに居たのじやが、能う考へて見ると可笑なあたまて、ちゃん〳〵坊主も笑はれぬ事じや」。

ここでは、ちょんまげを廃して散髪にするのが文明開化であると主張するのに、その反面教師として弁髪が引用されている。「開化物」のほとんどは、「文明」や「開化」を代表する主人公が、「野蛮」や「頑固」「固陋」を代表する人物に、文明のメリットを諄々と教え諭す構成になっているが、「開化物」が疑うこともせず前提としている「文明」対「野蛮」のコードの中の「野蛮」の側に弁髪が位置づけられ、しかも「ちゃん〳〵坊主」という呼び方も登場しているのである。

1874年(明治7)7月22日の『東京日日新聞』には、はやくも次のような記事が掲載されている。

○開成学校教師ワイラの雇人何細といふ支那人三河町一丁目の柳湯といふ混堂にて本石町の中川広吉がチャン〳〵坊主と嘲弄せしとて深くこれを憤り折節巡行の査官に訴へたれば双方を屯所へ呼びあけ査問あるに広吉かれ

図1『東京日日新聞』1874年8月10日

チャン〳〵坊主なれば私チャン〳〵坊主と呼びしのみチャン〳〵坊主ならざるものをチャン〳〵坊主とは呼ばず全くチャン〳〵坊主をチャン〳〵坊主と呼びしに相違なき段を供すチャン〳〵坊主と呼びしを以て詿違五十六条に依りて処分せられたりと

1874年といえば、5月に台湾出兵が強行されている。おそらくは、その影響があったのだろう。

また、同年8月10日の『東京日日新聞』には、弁髪をカリカチュアライズした絵が掲載されている。(図1) しかし、この時点では、まだ「蛇」であったことに注意しておきたい。

2　明治10年代　『團團珍聞』を例に

侮蔑的な「まなざし」が意味を持ってくるのは、そこに中国人が目に見えるかたちで存在している地域においてである。その意味で、中国人に対する侮蔑意識がひろがりはじめたのは、まずは彼らの寄留地である横浜や長崎、

図2『團團珍聞』1879年2月22日

そして東京などの都市においてであった。ひろたまさきは、「アジアへの蔑視が底辺民衆をいつごろからとらえはじめたかについては、まだ十分な論証はできないが、（中略）1876年（明治9）7月の『東京日日』には、在日清国人が日本の庶民に「チャンチャン坊主」と嘲弄された事件が、記者自身の蔑視感にも色あげされて報じられているが、それは征台事件のキャンペーンの影響が底辺民衆にも蔑視感を拡大させていったことを示しているように思われる」と指摘しているが(4)、地域性を無視して即座に「底辺民衆」全体にまで蔑視感が拡大していった事例とするのは先走りすぎである。あくまで「都市の」という限定付きであったそれは、琉球帰属問題、壬午軍乱、甲申政変など、中国との間に外交問題が生起したときに必ず浮上し、次第に蔓延していくのである。

絵入りの風刺雑誌である『團團珍聞』（1877年3月14日創刊）は、民衆の中に中国（人）＝「豚」のイメージを植えつけ拡大するのに大きな役割を果たした。以下で紹介する漫画や絵の中には、すでに滝澤・大日方が紹介しているものもあるが、行論の必要上、重複をいとわず引用することにしたい。

図3『團團珍聞』1879年6月21日

滝澤によれば、「豕」の絵の初出は、1878年（明治11）1月26日、第45号の「りう的と引き合う二本ぽうと豕」である。いうまでもなく、琉球の帰属をめぐる日清間の緊張の高まりを風刺したものである。

同様に、図2は、1879年（明治12）2月22日の第96号に掲載されたものであるが、絵の中にある英文の「The Japanese desire to transfrom the Riukiu into a ken against the remonstrances of their pig-tailed neighbours」という説明が物語っているように、この年三月に強行される沖縄の廃藩置県（琉球処分）を先取りした記事である。包丁で切って与えられようとしているのが「琉球芋」で、それを食べようとして待っている「豚」が清国である。

図3は、同年6月21日の第113号に掲載されたものである。日本と中国とが、文明化のウォーキングマッチをしているという絵である。その説明書きにはこうある。「大きな身体をしてさつぱり歩行ねへから皆に馬鹿にされるのだ　アレ見ろ豚〳〵とおか支那ふうで歩行くなア」　「小さへだけ有て蜻蛉が飛様にずん〳〵進んで往が何とも早足なものぢやアねへか　併余り急いて天窓（あたま）へばかり気が上り足下ハちとひょろつくなア　イヨー早いぞ〳〵」。

図4『團團珍聞』1882年8月5日

ここでも、中国は嘲弄の対象にされているが、同時に日本の近代化に対しても急ぎすぎで足下がおぼつかないと批判的にとらえられていることが注目できる。

図4は1882年（明治15）8月5日の第277号付録に掲載された絵である。背景には、7月23日に朝鮮で発生した壬午軍乱がある。「大評判頑虎（＝頑固）の見世物」と題されたこの絵に描かれている「虎」は朝鮮を指している。この虎は、「一度に二人りの人を食ひ開化の鼻を喰ひ切らんと歯向て来る」とされているように、文明開化の風潮に逆らっている頑固ものであることが見世物の価値となっている。額縁に入った絵をまえに演台で口上を述べている「とんぼ（＝蜻蛉）」が日本であり、それを見ている観客の中に「豚」と「鷲」がいる。「鷲」はおそらくアメリカを指しているであろう。

このように、「豚」で表象されることが定着してきた清国は、翌83年（明治16）6月13日の『團團珍聞』第345号で、今度は「仏狼」と相撲を取らされている。図5がそれである。いうまでもなく、安南の領有をめぐるフランスと清国の対立の激化を踏まえたものである。ただ、その説明書きをみると、

図５『團團珍聞』1883年６月13日

「此方に扣へし豚が嶽ハその体肥大にして…仁王立ちに踏跨り」と書かれてあり、「狼山」に必ずしも負けてはいない。むしろ互角にわたりあうだろうという予測である。そして、そのとばっちりに注意することが指摘されている。

しかし、同年９月１日の『團團珍聞』第368号では、今にも襲いかからんとする「フツ狼」から必死に逃げようとしている「豚」の姿が描かれることになる。「フツ狼」が「豚」をつかまえられないのは、マダガスカル問題や国内問題などの「首輪」と、英米独露が邪魔をするせいであると述べられている。（図６）

以上のように、明治10年代の『團團珍聞』を見ていくと、清国＝「豚」の表象が定着していく過程が手に取るようにわかる。アメリカに押し寄せる中国人労働者問題では、うるさい「蝿」として描かれたりしてもいるが、基本的には「豚」のイメージで一貫している。

では、なぜ「豚」なのだろうか。まず、弁髪を「豚尾」と呼んでいたことから来ていることが指摘できる。つぎに、図体が大きいけれども弱い、とい

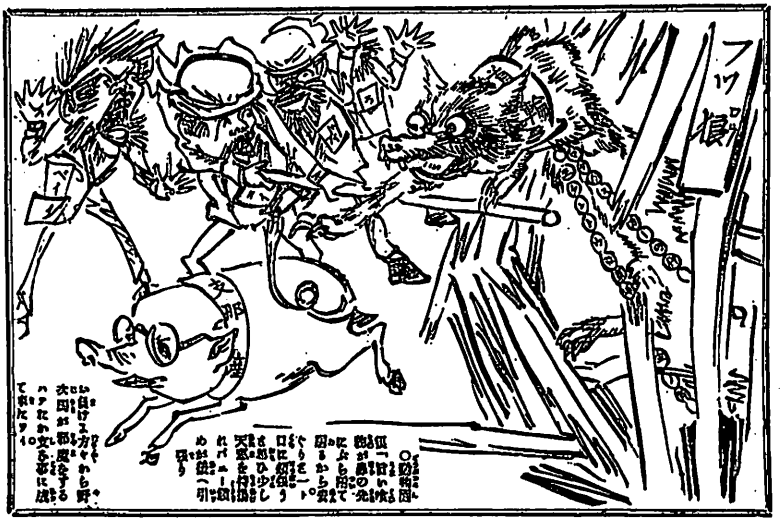

図6『團團珍聞』1883年9月1日

うイメージが投影されたことが考えられる。もっとも、坂野潤治がすでに指摘しているように、以上のような「巨視的な中国観」と同時に、「微視的な中国観」、つまり北洋軍閥に代表されるように軍備の増強につとめているあなどれない強国というイメージも、当時の日本には存在していた。[5]その一端は、図5にもうかがえる。第三に、「豚」＝「不潔」というイメージはどうであろうか。わたしたちは、ここで、ユダヤ人が同じように「豚」のイメージで語られていたことを想起する。15世紀末にイベリア半島から追放されたユダヤ人たちを指す「マラーノ」とは、「豚」の意味に他ならなかった。エードゥアルト・フックスの『ユダヤ人カリカチュア』によれば、「ユダヤ人の豚」は13世紀末に登場し、15世紀から16世紀にかけて一般化していったという。当時のユダヤ人は宗教上の理由から、豚から作られたものはいっさい口にしなかった。そうした相反するものを組み合わせ、豚の乳を飲んだり、豚の糞を食べたり、汚物にまみれ悪臭を放つ豚とのもっとも親密な関係を強調することで、ユダヤ人に対する軽蔑を表現しようとしたとフックスは分析している。

しかし、こうした中国人に対する「豚」＝「不潔」イメージは、この時点ではまだ成立していないのではなかろうか。両者が明確に結びつけられて語られるようになるのは、内地雑居に関連して中国人労働者問題がさかんに論じられた日清戦後のことであると考えられる。

3　明治10年代　新聞報道を例に

芝原拓自「対外観とナショナリズム」が指摘するところによれば、『東京横浜毎日新聞』の1877年12月７日の紙面に、張春舟という中国人の投書があり、新聞等で「必ズ弁髪ノ字ヘチャンチャント仮字ヲ用ヒ」たり、「豕尾頭抔ノ字」を平気で使ったりして、庶民が中国人を嘲弄侮辱するような傾向を助長しているようでは、日中間の善隣友好に差し障りが出かねない、と訴えていた。

たとえば、「琉球処分」をめぐって清国との緊張が高まっていたころ、『曙新聞』は1879年８月18日の社説で「外戦ノ予備」を掲げ、次のように主張していた。

> 若シ（中略）支那ト兵ヲ構ヒ其曲直ヲ砲艦ニ訴フルノ事アルニ至テハ其攻戦ノ難易ト云ヒ軍資ノ大小ト云ヒ其豈西南ノ一役ニ止マランヤ誠ニ吾邦ノ一大事ト謂ハザルベカラズ且支那人緩慢懶惰ノ甚ダシキ兵事ハ最其短ナル所ノ如シト雖トモ然ルモ其国ノ広キ其兵馬ノ多キ苟モ万中二千ヲ抜キ千中二百ヲ掄ビ百中ニ又十ヲ撰ビ一ヲ択バンニ勁兵精卒ノ十万廿万ヲ得ンコト豈難シトセンヤ況ンヤ左宗棠ノ如キハ積年胡辺ニ馳駆シ磧風ニ梳リ氷霰ニ沐シ百戦経験スル所アルヲヤ之ヲ奈何ンゾ豚尾奴ヲ以テ一概ニ之ヲ侮ルベケンヤ

ここでは、「豚尾奴」という侮蔑的な呼称を用いつつも、清国が侮るべからざる存在であることを強調している。つまり、清国に対する潜在的な恐怖心の裏返しとしての蔑称であったと考えることも可能である。

また、自由民権運動の機関紙的存在であった『東洋自由新聞』の1881年４月13日の紙面には、次のような記事が出ている。

○一昨十一日午后第三時頃、横浜百四番地在住支那人道信が深川裏大工町を通行する折、同町三番地の大塚伊三郎長男福松が鳥渡戯にチャンチャンと悪口をきゝしを憤り蝙蝠傘を以て打て掛るを、父の伊三郎が是支那人なにひろくと互に争論の半に巡査来り相方説諭して帰したりと。世の親たる者、外国人の為に打擲さるゝ様なことを引起さぬ様兼て戒めおかれよ

いっぽう、中国人の居留地が近代以前から存在していた長崎の新聞ではどうであったろうか。

まず、1882年6月24日の『西海新聞』の記事である。

○チャン〳〵坊主が日本の児供を欺まして本国へ売り渡すとの事ハ是まで横浜等にて度々ありし所なるが此頃神戸にても段々此事が多くあるより親々たちハ頻りに心配し居ると云へハ皆なさん要心が肝腎であります

当時の日本民衆が文明開化に底知れぬ恐怖心を抱いた理由の一つに、「異人」が子どもをさらって外国に売り飛ばしているという風評があった。ここでは、それを清国人の仕業として注意を促している。

また、『鎮西日報』1882年10月22日の第3面には、次のような記事が掲載されていた。

○豚尾空中に飛　当区広馬場にて去る十六日支那人(あちこ)が二人何んの訳にやチーチャ〳〵と相方争ひ終に大喧嘩となりて一人の支那が他の頭の豚尾を掴みむやみに引くと豚尾(かみのけ)は一本も残らずぬけ去り空に飛び上り跡ハ白色になりければぬかれた支那人ハ太きな声にて啼き出すに一人は勝利を得たりと思ひしか豚尾をふりてそのまゝ逃げ去りたりと広馬場の鳥売りの咄し居るを聞きしまゝ

この記事の後日談として、次のような記事が11月5日の紙面に出ていた。

○取消　弊社新聞一千二百九号の雑報に豚尾空中に飛と題し其文中にも豚尾の二字を用ひたる処ありしに大浦居留支那理事館より豚尾の両字穏ならざるに付取消べしとの照会ありて因て豚尾の字ハ総て取消す

つまり、「豚尾」の呼称を問題視した清国「理事館」より抗議があったというのである。このことからも、「豚尾」に対して中国人がすでに侮蔑的な意味合いを感じ取っていたことがわかる。これらは、壬午軍乱の後のことであり、清国側も余計に神経をとがらせていたためであったろう。

ちょうど同じころ、人力車夫の組織である車会党の中心人物の一人三浦亀吉は、10月4日に開かれた車夫懇親会でつぎのような祝文を朗読している。

（前略）権利を保ち一生安楽に暮さんと思はゞ各々愛国の心なかるべからず愛国の心とは則ち我日本国を愛するといへる事にて今その道理を説かんに譬へば支那の如く外国の赤髯奴に辱しめられ我儕（われわれ）にまで豚尾坊頭（ちゃんちゃんぼうず）と笑はるに至りては耻づべき悔むべきの事ならずや是畢竟人民愛国の心なく其国の弱きが故なり人民愛国の心なく其国の弱ければ外国の侮りを受くる決して免れざるところなり[6]

人民に愛国心が必要であることの強調は、典型的な自由民権派の言説であるが、ここで留意すべきは、後に典型的に唱えられるようになる、中国人には愛国心が薄い、もしくは無い、という言説が、すでに登場していることであろう。

つづいて、1884年（明治17）12月に発生した甲申政変前後の新聞報道をみてみよう。まず、12月20日の『東京横浜毎日新聞』の記事である。

○支那人日本館を囲むと題しなば又た何事の始まりしやと思し召さんが、茲に一昨日午後九時ごろ、築地有一館の生徒山崎重五郎、岡繁の二人が入舟町なる繁の湯へ入浴せし帰り途、一人が、時に君今度の朝鮮事件でも又彼の豚尾奴（ちゃんちゃんめ）が我が兵に対し無礼をしたとは、実に性も懲りもない奴だ、と話しながら行く後ろに、同町四丁目二番地大取方に寄留する支那人林□

掠林宗□の二人が来合せて、之を聞き届け唾を吐き掛けたるに、生徒二人も亦た唾を吐き返し、斯んなものに掛りて閑取らば、我々反て馬鹿と言はれんと其儘館に帰りしが、跡にて彼の支那人二人は大取方の台所より包丁抔を持ち出し、其近辺に住む同国人数名を語い、有一館を囲みて騒ぎ立ち居る所へ、巡行の警吏が来り其筋へ拘引の上説諭したりという（□は判読不能な文字をさす）

有一館とは、自由党の血気盛んな青年壮士が寄宿する場所で、この記事に出てくる山崎重五郎と岡繁の二人は自由民権派であった可能性が高い。このように、自由民権派の中にも清国に対する蔑視感が蔓延していたことは、次の記事からも見て取れる。

○鶏と豚　去る一九日の事東京にて和歌山県の野田久六郎（久太郎カ）といへる人が生きたる一頭の豚を荒縄にて縛り四人の人夫にこれを牽かせ自身は片手に鶏を持ち片手に加藤清正の像を画きたる掛物様のものを捧げ異様の風にて新橋より日本橋辺まで大通りを往来したるが物見高き東京の人等は何事なるぞと四方より集り来り處々にて余程の騒ぎを起したりと亦奇なりと謂ふべし

1885年１月19日に東京の上野公園で開かれた志士大運動会の様子の一こまを報じた、『大阪朝日新聞』１月23日の記事である。これまで検討してきたことから、野田久太郎が引き連れていた豚が清国を表象していることは明らかである。また、自身が持っていた鶏とは、加藤清正像とセットになっていることや、朝鮮を「鶏林」と呼ぶことなどから、朝鮮を表象しているのは間違いない。

生きた豚は、京都でも登場した。『大阪朝日新聞』１月25日の記事である。

○屠豚運動　京都の有志者は時事に感激せるの余り同意者三百余人と共に今日豊国神社境内の芝生に於て屠豚運動会といふを催ほし会訖れば一同列を正して京都市中を歩き最前には紙製の○○○○○○○に模したる物の槍

に突刺したるを捧ぐる者あり又豚の首筋を縒めながら豚殺せ豚殺せと連呼する者もある趣向なりと

ここでも、先ほどの記事の「加藤清正」同様に「豊国神社」＝豊臣秀吉の朝鮮侵略が想起され、その「記憶」とともに「豚殺し」の儀式めいたものが行われている。文中の「○○○○○○○」に入るのは、おそらく「ちゃんちゃんめ」という言葉であったろうか。

京都の運動で引き回された豚の運命がどうなったかはわからないが、東京で野田久太郎が引き連れていた豚は、その後、上野公園で開かれていた大運動会で実際に殺され、参加団体の一つ佐賀青年会のメンバーによって竹槍の先に突き刺されるという始末となった。この大運動会を企画したグループは様々であったが、自由民権派のグループも多数参加していたことが確認されており、民権派の中国に対する侮蔑意識はとても激しいものがあった。

こうして、甲申政変を契機に民権派の若者たちの行動によって示された中国に対する敵愾心と侮蔑意識は、それを見物していた民衆や、新聞報道を通じてより広範な民衆の中に受容されていったと推測できる。それをうかがわせる記事を次に引用する。

○日清談判…清国公使館に居る同国人六名は、何も京橋区宗十郎町の亀ノ湯に来り、二階に上りて茶湯と女と戯るるを乞よなき楽しみとなし居るが、去る二八日の夜も此六人が打ち揃って入り来り、やがて湯に入りしが、中にて日本人と言合いを始め、砲丸ではない湯水を注ぎ合いし末、六人は湯より上りて二階へ往かんと為せし時、湯の中にて一人の男がイヨ「おたま杓子の瀧上り」と評したり。斯くと聞く此方はムッと憤り、降り来りて矢鱈無性に他人を執へアナタ言いました、ナニ己レが何時言った、と談判最中、一人の支那人は巡査派出所に駈け付けて之を告げ、巡査も出張したれど、奈何せん、相手の人の知れざれば仕様ことなく、支那人の方は到頭泣寝入になりたりと

1885年３月４日の『東京横浜毎日新聞』の記事である。甲申政変時は、清

図7『万朝報』1895年1月11日

国公使館が日本人の襲来を恐れて厳戒態勢をとっていたというが、彼らにとって、日本人の侮蔑意識を伴った攻撃性が非常な脅威であったことを物語っていよう。

4　日清戦勝と侮蔑意識の定着

日清戦争の最中、新聞紙面では「チャンチャン」「豚尾漢」「豚兵」のラッシュであった。

『万朝報』には、豚の足をライオンがなめている絵や、「日清大相撲」と題する絵（1895年1月11日、図7）が掲載されている。「日清大相撲」に登場する力士名は、「秋津洲」と「豚の鼻」である。見物人の「黒髯」が、「豚の鼻は大きいが、秋津洲は相撲巧者なので小さくとも豚の鼻を投げ飛ばすだろう」というと、「青目玉」が「なかなかそうはいかぬ。秋津洲がいくらうまくても、終いには疲れて負けるにきまっている」という。「黒髯」と「青目玉」が固唾をのんで見つめていると、「秋津洲」の一突きで「豚の鼻」の体がばらばらになってしまい、勝負はあっけなくついた。ここでも、明治10年代から慣用されてきた「秋津洲」＝「蜻蛉」（トンボ）＝日本と「豚」＝清国という表象が利用されて、日本の勝利が願われている。そして注目すべきは、「黒髯」と「青目玉」という観客の設定である。ここには、日清戦争が、欧米列強の監視の中で行われた「文明国」グループへの加入試験であったことが見事に画かれている。

それだけではない。『万朝報』は、被差別部落に対する偏見を利用して、次のようにも述べている。1894年9月19日の「八面鋒」と題するコラムの文

章である。

▲新耳塚　一萬以上の清兵降りて俘虜となる我に取て是程の迷惑なし我ハ文明国法に従ひ一々之を焚ひ置かざる可からず、吁迂焉、何ぞ悉く其耳を切り新耳塚を築かざる▲新穢多万余の俘虜、殺す可からずとせバ連帰りて如何にせん、獄舎も此多数を入るゝ能はず彼等を穢多となし市町村の一隅に置て工業上の苦役に充んにハ

「耳塚」とは、いうまでもなく秀吉の朝鮮侵略の際に、殺害した敵兵の鼻や耳をそぎ落として桶や瓶に入れて持ち帰ったものを集めて埋めたもので、京都の方広寺などにあることで有名である。清国兵の俘虜を殺して「新耳塚」を作れ、それが不可能ならば日本に連行して「穢多」にしてしまえ、という過激な主張は、文明国風に振る舞うことを要請されていた日本軍に隠されていた本音であったのかもしれない。それが表面化したのが、旅順港虐殺事件であった。(7)

ところが、『万朝報』のこの記事よりも早く、南国鹿児島の『鹿児島新聞』8月4日の紙面には、「豚尾を切取るべし」と題する次のような記事が掲載されていた。

昔し豊太閤の朝鮮を征伐するや我兵競ふて敵の耳を切取り持帰りたる由にて今尚ほ耳塚の古跡あり今回は其首を取る代りに彼の豚尾を切取り戦勝の後これを集めて錨綱を造るとか何とか後日の紀念となす可し或説に西洋婦人は髢（髪カ）用として支那人の豚尾を一本一弗に買受る由なれば臨時大売捌所を設けて豚尾の輸出をなすも一興ならんといふ

「豚」の表象の本家本元というべき『團團珍聞』は、日清戦争の時期にも「豚」の絵を多数登場させているが、文章においても嘲弄・侮蔑をエスカレートさせていった。1894年9月22日の第980号には、「酒蛙説」（社説のもじり）として山陽道人の「チャン〳〵の末路」が掲載されている。また、第989号（1894年11月24日）と990号には、骨皮道人の「ちゃん〳〵尽しいろは頭附か

ぞへ唄」なるものが掲載され、「いの字とセー如何に強情張るとても、態を見ろ、最早や蕪の鼠なり、コノちゃん〳〵坊主」、「りの字とセー理も非も分らず豚尾めが、無敵流、日本に手向ふめくら蛇、コノちゃん〳〵坊主」などとうたわれていた。團團社では、こうした狂歌や替え歌を集めて『ちゃん〳〵集』なるものまで発行したのである。

作家の谷崎潤一郎は、当時のことを次のように回想している。

> 日清戦争の時分、われわれは中国人のことを「チャン　チャン」と云ったり、その下に「坊主」をつけて呼んだりした。これはわれわれが欧米人からジャップと呼ばれたものと同じやうな意味でもあるが、さう云ってもチャンチャンと云ふ音の中には多少の愛嬌も含まれているので、ジャップよりは増しであったやうにも思う。兎に角当時の子供たちは面白がってその呼称を使ったもので、「坊主」を下につけて呼ぶなどは殆ど幼童に限っていた。が、中国人に対して甚だ失礼であるその呼び方も、彼等が弁髪を廃した頃から次第にわれわれも口にしないやうになった。[8]

日清戦争後、日本の近代化に学ぼうとして、清国から初めての留学生が日本にやってきたのは、1896年1月3日のことであった。13名の留学生が来日した。しかし、そのうちの4名は、2、3週間もしないうちに帰国してしまった。その理由は、子どもから「チャンチャン坊主」といって冷やかされたことと、日本の食事が口にあわなかったためであったという。[9]

子どもたちの無邪気さが持っている毒は、日本の植民地となった台湾から派遣された留学生にも、見境無く浴びせかけられた。『万朝報』から関連記事を二つ引用してみる。

> 台湾学生に対する警戒　総督府国語学校教授本田嘉種の引率し来れる同校土民学校生二十一名ハ目下下谷区末広町の旅館田嶋方に投宿中なるが何れも尚支那服を着け弁髪を垂れ居るより頑是なき児童等ハチヤンチヤンと罵り瓦石を投ずる等危険の事多きより拓殖務省にてハ特に警視総監に対し之が警戒方を依頼した由（1897年7月31日）

台湾学生　（前略）昨社員本田氏を訪ひ同氏の通訳に依り種々学生と談話を試みたるに彼等ハ未だ国語に通ぜざるも日用の簡易語ハ能く記憶し居れり社員第一に彼等が内地に入りし以来如何なる感じを惹起せしやを質せしに「日本ハ善き国である、人々皆清潔である、景色が甚だ善い、台湾に帰れバ話して聞かせます」と云ひ更に国人ハ善人多きか悪人多きかとの問に答へてハ「或是有善人或是有悪人今も窓の下へ来てチヤンチヤン坊主と云ひ石を打ちて行きました道を歩るくにも屡バ打たれて困ります」と云へり（後略）（1897年8月13日）

本田が乃木希典台湾総督に相談したところ、乃木は、彼等に「内地風」の服と帽子を買い与え、着用させたという。その後は、彼らに対して「チャンチャン坊主」という蔑称が浴びせかけられることも少なくなったらしい。差別と同化（日本化）との相関関係を想起させるエピソードである。

おわりに

以上、中国人に対する蔑称である「チャンチャン坊主」が蔓延していくとほぼ同時に「豚」のイメージが成立し、定着していく過程を見てきた。注意しなければならないのは、日清戦争の前までは、侮蔑や嘲弄のまさざしと同時に、中国に対する恐れや日本の近代化に対する反省的な批判が存在していたことである。その意味では、民衆の侮蔑的な中国観は、一直線に形成されたのではなく、揺れ動きつつ形成されたと評価するのが正しい。それを決定づけたのが日清戦争であったことは、すでに指摘したとおりである。

そして、「豚」のイメージの中に「不潔」という意味が付加され、“大きくて弱い”イメージから「不潔」の方にウェイトを移動させていくのは、内地雑居問題が契機であった。横浜などの「支那人街」のルポルタージュが新聞等にさかんに掲載され、その不潔さと非衛生的な環境が強調されていった。そして、「社会のバチルス」といった中国人観がまき散らされていったのである。それは、まぎれもなく、近代日本におけるレイシズムの歴史である。

もとより本稿は、中国（人）に対する言説とイメージの系譜的研究の域を

出ず、その背景にある社会経済的な構造にまで斬り込んではいないが、本稿に即して残された課題は、中国人に対する差別的呼称が「チャンチャン坊主」から「チャンコロ」に、いつごろどのようにして変わったのか、ということである。この問題を考えるときに、先に引用した谷崎潤一郎の回想が一つの手がかりを提供している。谷崎は、「チャンチャン坊主」という呼称も「彼等が弁髪を廃した頃から次第にわれわれも口にしないやうになった」と指摘している。先の新聞記事によって明らかなように、「チャンチャン坊主」という呼称は、弁髪と密接に結びついていた言葉であった。だから、弁髪を帽子で隠せば、「チャンチャン坊主」と呼ばれることもほとんどなくなったのである。

中国で弁髪が廃止になったのは、辛亥革命によって中華民国が成立したことによる。とすれば、1912年の中華民国の成立を一つの画期として「チャンチャン坊主」という差別的呼称が消えていったと推測できる。

それでは、「チャンコロ」という呼称はいつごろから登場してくるのであろうか。

管見の限りでは、1918年（大正７）にはすでに一般的に使用されていたことが、資料的に確認できる。まず、さねとうけいしゅうの『増補　中国人日本留学史』に引用されている王拱璧『東遊揮汗録』の中の一節である。

それは1918年５月６日の夕方のできごとであった。国恥記念日を前に相談をしていた中国人留学生の会合に警官が介入し、もみ合いになった。そのとき、警官は次のように言い放ったという。「われわれ警官は、きさまらが会議をひらくようなそぶりとか、治安をみだすそぶりとかをみとめたら、それを罪とかんがえるのだ。…きさまらチャンコロが文明だなんていうのはチャンチャラおかしいや！」。留学生たちが逮捕され連行されていく途中、床屋のおやじが言った。「チャンコロのばかやろう、大日本帝国の威光をしらねえか？」、と。

もう一つは、宮崎滔天が1918年11月12日に『上海日日新聞』に送付した「東京より」と題する連載ものの原稿であり、滔天が日本人の権威主義的な体質を痛烈に批判した部分である。

彼等は通常、白人を呼ぶに毛唐を以てし、支那人を呼ぶにチャンコロと称し候。而も面と向って白人に対するや…その欲心を失はざらんことを努め、その支那人に対するや、恰も奴隷に対する如く、二言目には面と向って、此のチャンコロ奴と呼ぶが通例に候。畢竟弱者に強く強者に弱き態度に候。(10)

このように見てくると、辛亥革命後、1913年（大正２）９月に南京で日本人が殺害された（南京事件）ことをめぐり、中国に対する強硬論が沸騰し、1915年（大正４）に21ヵ条要求をつきつけていく過程で「チャンコロ」という呼称が登場し、瞬く間に普及していったと推定することができる。「チャンチャン坊主」という呼称が使われなくなったとしても、その大本にある中国人に対する差別意識＝日本人の優越意識が何ら変わっていないのだから、あらたな蔑称が登場するのは単に時間の問題であったといえよう。

こうして、中国人を人と思わなくなった戦前の日本人は、中国大陸の各地で南京大虐殺に代表されるような虐殺事件や婦女子に対する強姦殺害事件を起こし、あげくには731部隊にみられるように中国人を「丸太」と称して人体実験に使うなどの蛮行を繰り返したのである。

はたして、「チャンコロ」という言葉がほとんど死語になった戦後日本を生きる私たちは、こうした戦前のレイシズムを完全に払拭できているのであろうか。近代の日本人のほとんどが無邪気で無自覚なレイシストであったという歴史的事実を、今どれだけの日本人が自覚的に受けとめているだろうか。

註

（１）荒畑寒村『寒村自伝』上、『荒畑寒村著作集』第９巻所収、平凡社、1977年、41～２頁。
（２）生方敏郎『明治大正見聞史』中公文庫、1978年、33頁。
（３）『福沢諭吉全集』第1巻、岩波書店、1958年、13～4頁。
（４）ひろたまさき「対外政策と脱亜意識」『講座日本歴史７』近代１所収、343頁、東京大学出版会、1985年。
（５）坂野潤治「明治初期（1873－85）の「対外観」」日本政治学会編『国際政治』第71号「日本外交の思想」1982年８月。
（６）絲屋寿雄『自由民権の先駆者』大月書店、1981年、43頁より重引。
（７）井上晴樹『旅順虐殺事件』筑摩書房、1995年。
（８）「老いのくりごと」1954年１月、『谷崎潤一郎全集』第28巻、252～３頁。
（９）さねとうけいしゅう『中国留学生史談』第一書房、1981年。

(10)『宮崎滔天全集』第2巻、平凡社、1971年、41頁。

参考文献

荒野泰典「一八世紀の東アジアと日本」『講座日本歴史6』近世2、東京大学出版会、1985年
上杉允彦「江戸時代の日本人の中国観」『高千穂論叢』52巻2号、1977年
エードゥアルト・フックス『ユダヤ人カリカチュア』羽田功訳、柏書房、1993年
大日方純夫『はじめて学ぶ日本近代史』大月書店、2002年
小松裕「牛と競争しようとした娃」荒木敏夫他編『日本史のエッセンス』有斐閣、1997年
さねとうけいしゅう『増補　中国人日本留学史』くろしお出版、1981年
サム・キーン『敵の顔』佐藤卓己・佐藤八寿子訳、柏書房、1994年
芝原拓自「対外観とナショナリズム」『日本近代思想大系12対外観』岩波書店、1998年
ジョン・ダワー『人種偏見』猿谷要監修・斉藤元一訳、ＴＢＳブリタニカ、1987年
戯鴎「日清戦争直後における対中国観及び日本人のセルフイメージ」国際日本文化研究センター『日本研究』第13号、1996年3月
滝澤民夫「日清戦後の「豚尾漢」的中国人観の形成」『歴史地理教育』第562号、1997年4月
滝澤民夫「日清戦後の「豚尾漢」的中国人観の形成」(二)『歴史地理教育』第577号、1998年4月
日比野丈夫「幕末日本における中国観の変化」『大手前女子大学論集』20、1986年11月
古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』緑蔭書房、1996年